

により、チューリップ球根栽培農家の抱える問題をみてみたいと思っている。

砺波市はわが国でも代表的な散居村地域であり、その耕地のほとんどが水田である。この地にチューリップが導入されたのは大正7年といわれているが、その後水田裏作として発展していった。気候・土壌条件等の自然条件に恵まれていたこともあるが、歴史的基盤・独自の組合組織など様々な要因がその発展理由として考えられる。特に、富山県花卉球根農業組合は県唯一の専門農協として生産・販売・出荷を一手にひきうけており、組織的な栽培指導をおこなっている。従って、他の球根産地と比較しても、切花等よりも球根栽培に力を注ぎ、計画的・総合的な生産・出荷をすることができる。

このように、しっかりとした組合組織を背景に、海外への輸出も早い時期からおこなわれていたが、それも25年ほど前から大きく変化してきた。最初は大規模な整備や高度経済成長による兼業化の進展で、栽培者数・出荷数・栽培面積数が昭和40年代から激減したのである。それも、技術の進歩・改良で対応されたのだが、再び円高問題が明らかになってきた。それまで輸出を中心に出荷をしてきたのが、その方法では輸出球数も伸び悩む一方で球根生産者の生活も維持することが困難になっていった。そこで球根組合の側でも、栽培技術の向上や新品種の改良に努力する一方、出荷をそれまでの輸出中心型から国内直販にウェイトをおく方向に変換したのである。このため、消費者のニーズに対応したこまやかな販売や、新商品・アイデア商品の開発に力を入れている。

次に庄下地区におけるチューリップ球根栽培の事例を調べた。庄下は富山県のチューリップ栽培が始められた場所であり、現在も砺波市の球根栽培者の約3分の1が集まっている地域として、富山のチューリップの代表地となっている。この庄下地区での球根栽培農家の分布状況、栽培面積の推移を土地台帳からまとめてみると、次の事実がわかった。

①栽培農家数は減少傾向にあるが、栽培地の集約化が進み、各農家が大規模化してきている。

②栽培農家は、地区の中でも耕土の条件がいい西側に集まっており、東側には現在では全く農家の広がりがみられない。

以上のことから、庄下におけるチューリップ球根栽培は、他の地域と同様に、自然・社会条件の影響を受け変化しており、この意味でも庄下は富山県の球根栽培の典型的な地域といえる。

科学や技術の進歩にもかかわらず、農家のチューリップ離れは深刻化する一方である。特に若年者は農業よりも会社勤めをする方が多く、生産者の高齢化や後継者不足が大きな問題となってきた。また、チューリップ大国のオランダが日本に進出してきており、国内生産地は、とても大変な立場にたたされている。

このような様々な問題を抱えながらも、チューリップは富山の花として、北国の春を色どる景観の一つとして、これからもずっと存続し発展してゆくであろう。そして、新しい時代に向かって、オリジナリティあふれる砺波のチューリップが、今後も私達の間を楽しませてくれるよう希望している。

八王子市における農業の水利用

高山 浩子

農業の水利用は、稲作には河川水を利用し、畑作には雨水を利用するのが一般的だが、その他にも地域の特性に応じた様々な利用法がある。本論文では、農業を水利用の面から捉え、八王子市の農業用水の水源を分類することを目的とする。また、八王子市は都市化の進展が著しく、農業の水利用にもその影響が大きく表われている。そこ

で、同時に農業の水利用という立場から八王子市の都市化と農業との関係を捉え、八王子市の農業の実態を明らかにしていく。

八王子市は、都心から約40kmの首都圏に位置し、総面積は、187.79km²、人口は約43万人である。古くから交通の要衝として交易等で繁栄し、農家の副業から始まった織物業は八王子の中心産

業となったが、近年は衰退の一途を辿っている。都市化は昭和30年代から急速に発展し、農地は次々と宅地に姿を変え、現在では農地率は6%にも満たないが、それでも東京都全体の収穫面積の1割近くを占めている。八王子市の農業は畑作中心で、だいこんの作付が最も多いが、近年では施設園芸が増加しており、より集約的な都市農業が普及しつつある。八王子市は全域が都市計画区域に指定されており、そのうちの65%は市街化区域とされているが、農地の6割以上はこの市街化区域内にある。

八王子市の農業の水源は、河川水・雨水・地下水・湧水・水道水の5つに大別できる。その中で都市化の影響を最も受けやすいのは河川からの取水である。農地の宅地化にともない河川から取水している農家戸数も最近20年間で1/4程度になったが、現在でも500戸の農家が河川水を利用している。八王子市は下水道の整備が遅れており、市街地以外は未整備に近い。したがって、家庭雑排水等は河川及び農業用水路に流されることになり、近年河川等の汚濁が著しくなっている。事例として取り上げた3つの地区のうち高月地区は、市街地から遠く、宅地化はあまり進んでおらず、高月用水の取水源である秋川の水も水質は良好であるため、水利用の面ではあまり問題はない。一方、長沼地区は京王線沿線であるため宅地化が進んでおり、長沼用水の取水源である湯殿川は汚濁が進んでおり、さらに、用水路にも周辺住宅から家庭雑排水が流入している。

次に雨水であるが、雨水を利用する上で問題となるのは、雨水は作付を行うための必要量を得られるとは限らないということである。実際、数年

に一年の割合で農作物に影響を与える水不足が起こっており、灌水施設を備えておくことが望まれる。灌水施設としては井戸、つまり地下水利用が一般的である。小比企地区の畑10haは東京都の野菜生産団地としての指定を受け、補助事業として地下水を用いる灌水施設が作られた。川口地区では宅地化によって農業用水路が埋められたため、農家が共同で井戸を掘り、地下水を利用している。そのほかにも個人的に井戸を所有している農家もあるが、現在では地下水の汲み上げに対する規制が厳しくなっており、新たに井戸を掘ることは困難となっている。

また、八王子市は湧水地点が多く、農業に湧水を用いている農家もある。湧水の多い山際の谷戸を利用して、稲作を行う谷戸田が数多く存在するが、その他にも市内各所で湧き出ている水を利用している。中野山王では生産された野菜の泥洗いの場として利用しており、叶谷町では湧水から始まっている小川の水を用いて稲作を行っている。この小川は家庭雑排水の流入を防ぐために、二重構造になっている。水道水は、最近増加している施設園芸で利用されることが多いが、農業に用いる水量は多く、農家はかなり高額の水道料金を負担しなければならない。

今後、都市化の進展にともない農地はさらに減少していくことが予想される。実際、長沼地区では数年後に区画整理が行われる見通しで、それが実施されれば水田は姿を消し、長沼用水は消滅することになる。都市化の波を抑えることはできないが、計画性を持った土地利用を行っていくことが必要であろう。

丹後半島の砂丘の砂に関する考察

多 田 恵美子

砂丘は、どのような砂から構成されているのか。又砂丘を構成する海浜の砂は、どのような砂なのか。これらの砂の特徴や、地域的な差異など、砂に関する属性をいろいろな角度から研究していくことを目的とする。

研究方法は、まず文献で、できるだけ詳しく地

域の概要をつかんだ上で、現地調査をする。観察とともに、資料も採取する。これを研究室に持ち帰って分析する。

まとめ

今回の研究対象地域は、京都府丹後の久美浜湾と外海を区切っている砂州と、その東方に連なる